The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	A.ランボー : 古い肉体と新しい肉体
Author(s)	小谷, 征生
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1989, 23, p. 63-75
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47818
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

A. ランボー：古い肉体と新しい肉体

小谷征生

はじめに

作品『地獄の一季節』は，話者「俺」とキリスト教社会の角逐の記録である。いや，正確に言うならば，キリスト教社会の制度化された言語と話者の言葉，肉声との角逐の記録である。自己の詩的世界を創造するために，キリスト教社会の制度化された言語を退けようとするものの，退けきれず揺れ動く話者の姿が『地獄の一季節』にはっきりと看て取れる。一方，作品集『イリュミナシオン』の諸作品の中にも，『地獄の一季節』同様，キリスト教との戦いの表現された作品は見出せる。『陶酔の午前』，『ジェニ』，『美しい存在』の3つは「肉体」という語に与えられた特別な意味から捉えた場合，『地獄の一季節』同様，反キリスト教的色彩の強い作品であると考えられる。本論の目的は，これらの作品に用いられた「肉体」が持つ反キリスト教的意味を取り出し，この3作品の関連を探ること，そしてこの3つの作品の「肉体」と『大売出し』に現れる「肉体」との相違を捉えることにある。

1

まず，『陶酔の午前』を通して，「肉体」がどのような意味を持つのかを捉えることにする。

O mon Bien! O mon Beau! Fanfare atroce où je ne trébuche point! chevalet féerique! Hourra pour l'œuvre inouïe et pour le corps merveilleux, pour la première fois! (...) Ce poison va rester dans toutes nos veines même quand la fanfare tournant, nous serons rendu à l'ancienne inharmonie. O maintenant nous si digne de ces tortures! rassemblons fervemment cette promesse surhumaine faite à notre corps et à notre âme créés: cette promesse, cette démence! (...) On nous a promis d'enterrer dans l'ombre l'arbre du bien et du mal, de déporter les honnêtetés tyranniques, afin que nous amenions notre très pur amour[1].

作品は冒頭に「未聞の作品と驚異的な肉体に，初めての万歳！」とあるように，際立った歓喜が表出されている。そして，これを補完するように，「凶暴なファンファーレ」が響き渡る。ここで得られた何かが「この毒」で言い表され，それが「俺達の血管に残る」ことで，「俺達の肉体と魂」は「創造」される。そして，「創造された肉体と魂になされたこの超人的な約束」の内容には，はっきりと反キリスト教の視点が打ち出されている。「初めての万歳」を併せて考えれば，反キリスト教の視点を話者がここで明確に自覚したと言える。では，どうして反キリスト教の内容を持った「約束」が「肉体」に与えられたのだろう。その答えを得る手掛かりとなるのが『地獄の一季節』の次のような表現だ。

(...) — Reprenons les chemins d'ici, chargé de mon vice, le vice qui a poussé ses racines de souffrance à mon côté, dès l'âge de raison — qui monte au ciel, me bat, me renverse, me traîne[2].

(...) et je n'ai rien derrière moi, que cet horrible arbrisseau! (...)

Cependant c'est la veille. Recevons tous les influx de vigueur et de tendresse réelle. Et à l'aurore, armés d'une ardente patience, nous entrerons aux splendides villes[3].

自己の詩的世界の創造を目指し，キリスト教社会の制度化された言語世界を抜け出ようともがく話者の姿が看て取れる『地獄の一季節』において，話者の内部に根を張った「悪徳の木」が最終的に話者の外部に矮小化されて追い出されたことを表わす。「俺の背後にはこの恐ろしい灌木以外何もない」という一文は『地獄の一季節』を象徴していると言える。それに続く「暁に，燃え上がる忍耐で武装して，俺達は光り輝く街に入って行くことだろう」という一文の意味するところは，新しい世界はキリスト教世界に埋没している古い肉体が死滅するときに開かれるということである。「入る」という動詞が未来形で書かれ，その行為が現在のところ留保されているにしても，「悪徳の木」が外部に追い出された後に，新しい世界が開かれるといった表現の順序が取られていることは，詩的世界といえども世界を開示するのが肉体（身体）であるという認識が，詩人の内にあったことの証左に外ならない。従って，何よりもキリスト教に掣肘された古い肉体を死滅に導き，新しい「肉体」による詩的世界の創造が求められたのだ。

『陶酔の午前』では，古い肉体は作品の中には現れてこず，「創造された肉体」という表現，及びその「肉体」に与えられた「約束」の内容が明らかに反キリスト教的であることから想定されるに過ぎない。このことから明らかに，古い肉体よりも「創造された肉体」に重きが置かれていることが理解できる。が，「創造された肉体」とは，先に述べたように，作品冒頭で「未聞の作品と驚異的な肉体に，初めての万歳」と際立った歓喜と

して表現されるほどの何かが，「この毒」となって「俺達の血管に残る」ことによって，「創造された肉体」のことである。つまり，「この毒」は超越的な存在の肉体を思わせる「驚異的な肉体」と「俺達の創造された肉体」を媒介する働きを担っているのだ。

では，どうして作品中に超越的存在を措定し，「毒」を媒介物として，その超越的存在が「俺達」の許にもたらされるといった展開がとられているのだろうか。仮に，反キリスト教の視点を獲得し，キリスト教と対峙する決意をもった者がいれば，その者の存在の有り様は，当然それまでの有り様とは異なってゆくはずである。存在の有り様が異なってゆくということは，同時にその存在を包み込む世界の有り様も異なってゆくということである。しかし，そうした動きが起こるときには，何かその存在の力を遥かに越えた力が働いている。超越的な存在を作品の中に措定し，その「驚異的な肉体」と「俺達の肉体」とが「毒」によって媒介されるという表現が取られているのは，このような「俺達」の力を遥かに越えた力が「俺達」の存在に働きかけてくることを示すのに不可欠なことだと考えられたからである。しかし，またどうして媒介物が「毒」なのだろうか。このことを理解するためには，「毒」に対する詩人の独特な考え方を考慮に入れる必要がある。

> Le Poète se fait *voyant* par un long, immense et raisonné *dérèglement* de *tous les sens*. Toutes les formes d'amour, de souffrance, de folie; il cherche lui-même, il épuise en lui tous les poisons, pour n'en garder que les quintessences[4].

『見者の手紙』で知られるこの手紙のなかで，「毒」は，今このようにある，このようにしかあり得ない自己を成り立たせている当のものであると同時に，それとは異なった自己を成り立たせる可能性を含んだものとして

使われている。だから，詩人は「毒」と「毒の精髄」とを区別し，今の存在の有り様に埋没している限りは識別できない「毒」と「毒の精髄」とを識別し，存在の有り様を変えるためのインパクトとして様々な行為を想定しているのだ。

『陶酔の午前』の「毒」は，まさに『見者の手紙』に使われている「毒」に等しく，今の存在の有り様であるキリスト教に掣肘された古い肉体を変えてゆくものとして用いられている。この「毒」に媒介されて超越的存在の「驚異的な肉体」は「俺達」の許にもたらされ，「俺達」は「創造された肉体」によって，古い肉体を死滅に導いてゆく。このことを詩人の詩作行為に即して捉えれば，「創造された肉体」に宿る言葉，肉声によって詩的世界を開示するために，詩人はキリスト教社会の制度化された言語が巣喰う古い肉体を滅ぼすことに向かって行く，ということになる。従って，作品の最後に置かれた「今こそ，暗殺者の時だ《Voici le temps des assassins[5]》」という一文は，新しい世界を開くため，古い肉体を滅ぼすことへ向かう詩人の確固たる意志の表明に外ならない。

2

次に作品『ジェニ《Génie》』で「肉体」がどう取り扱われているかを見ることにする。

> Et nous nous le rappelons et il voyage... Et si l' Adoration s'en va, sonne, sa promesse sonne: 《Arrière ces superstitions, ces anciens corps, ces ménages et ces âges. C'est cette époque-ci qui a sombré![6]》

ここで使われている人称代名詞《le》，《il》，及び所有形容詞《sa》はそれぞれ作品の題名である「ジェニ《Génie》」を表している。そして，「ジェ

ニ」が与えてくれる「約束」の内容は，『陶酔の午前』における「約束」の内容とほぼ合致する。つまり，「これらの迷信」が「善悪の木」に，「家庭」── これに関する事柄は次のパラグラフで「それは女たちの怒りと男たちの陽気さとこの罪全体の贖罪を実行したりはしないだろう《il n'accomplira pas la rédemption des colères des femmes et des gaîtés des hommes et de tout ce péché[7]》」という表現をとって現れる ── が「我がもの顔の誠実さ」にそれぞれ対応している。この「打ち捨てる」べき対象の中に，『陶酔の午前』の「創造された肉体」に相対立するものとして想定される「古い肉体」──「打ち捨てる」べき対象である「迷信」，「家庭」と同列に置かれたこの「古い肉体」とは，まさにキリスト教に掣肘された肉体に外ならない ── が含まれている。そして，この「古い肉体」を死滅へと導くものとして「ジェニ」の「肉体」が次のように示される。

> Son corps! Le dégagement rêvé, le brisement de la grâce croisée de violence nouvelle[8]!

この一文から明らかなように，作品『ジェニ』は超越的存在を措定し，この存在の「肉体」によってキリスト教に掣肘された肉体を死滅に導くという展開になっている。が，『陶酔の午前』との比較では，「古い肉体」を排斥するという点では共通しているものの，表面的に，その超越的存在が何がしかの媒介によって此岸にもたらされるといった展開にはなっていない点では異なっている。こうした相違が生じるのは，「それは行ってしまわないだろう，それは降臨しないだろう《Il ne s'en ira pas, il ne redescendra pas d'un ciel, (. . .)》[9]」という表現を考慮に入れた場合，詩人が作品『ジェニ』をキリスト教に対する一種のイロニーに仕立てあげることの方に力点を置いているためだと理解することができる。しかし，

そうではあっても，次に示す表現を考慮に入れたなら，「ジェニ」も彼岸に止まっている超越的存在ではなく，此岸にいる「俺達」と結び付く存在であることが理解できる。

> Il est l'amour, mesure parfaite et réinventée, raison merveilleuse et imprévue, et l'éternité: machine aimée des qualités fatales[10].

ここで「ジェニ」は「愛」，「理性」，「永遠」と等価物とされ，さらにそれらがひとまとめに「機構」という語にくくられている。ここで，重要なのはその「機構」が「持って生まれた資質に愛される」という箇所だ。この表現から理解されることは，己に備わった資質を認識したうえで超越的存在たる「ジェニ」に働き掛ける，言い換えれば，超越的存在たる「ジェニ《Génie》」と「俺達」── というよりも「俺達」の内なる〈génie〉── との合一を企てるということだ。それは取りも直さず，新しい世界の開示を企図するということである。超越的存在たる「ジェニ《Génie》」と「俺達」の内なる〈génie〉の合一によって，新しい世界の開示が企図されるといった捉え方は，作品『小話』の「王子」と「ジェニ」の関係を通して可能なものとなる。

> Un soir il galopait fièrement. Un Génie apparut, d'une beauté ineffable, inavouable même. (...) Le Prince et le Génie s'anéantirent probablement dans la santé essentielle. Comment n'auraient-ils pas pu en mourir? Ensemble donc ils moururent.
>
> Mais ce Prince décéda, dans son palais, à un âge ordinaire. Le prince était le Génie. Le Génie était le Prince[11].

「王子とジェニは，きっと本質的な健康のうちに無と化したのだろう」及び，「従って，彼らは共に死んだのだった」という箇所からは，「王子」と「ジェニ」がひとつになって，「王子」でも「ジェニ」でもない存在に生まれ変わったことが理解される。言い方を変えれば，「ジェニ」とは「王子」の宿命であり，その宿命の認識が己をそれまでとは異なったものに変える。作品『小話』はそうした寓意を含んだ作品である。

作品『小話』が含んでいる寓意をもとにして，超越的存在〈Génie〉と「俺達」の内なる〈génie〉，つまり創造主体の原基である〈génie〉との合一を捉えた場合，その合一とは，新たなる世界の創造，キリスト教社会の制度化された言語から解放された言葉，肉声による新しい世界の創造を意味する。しかし，言葉によって新たなる世界を開示することは，制度化された言語の巣喰う肉体では不可能である。だから，言葉，肉声の宿る肉体がキリスト教の桎梏から解放されることが不可欠であるとされ，解放された肉体による新しい世界の創造が強く求められたのだ。

以上2つの作品から，「創造された肉体」と「古い肉体」の分析を通して明らかになったことは，対キリスト教の問題は，世界を開示する肉体（身体）に収斂されるということ，つまり，言葉によって新しい世界を創造することは，キリスト教に掣肘された「古い肉体」，制度化された言語の巣喰う「古い肉体」では不可能であるとの認定の下に，「新しい肉体」，制度化された言語から解放された言葉，肉声の宿る「新しい肉体」を持った超越的存在を措定することにより，「古い肉体」の死滅，キリスト教の桎梏からの解放が企図されたということだった。

3

次に取り上げる『美しい存在[12)]』にあっても，超越的な存在が措定される。しかし，『美しい存在』においては，『陶酔の午前』や『ジェニ』と

異なって，生と死の相克がある種のディナミスムをもって描かれていることが注目に値する。反キリスト教的表現は見いだされないものの，先の2作品において問題にされた「古い肉体」の死滅といった文脈に即して捉えてゆけば，『美しい存在』において描かれている生と死の相克は，超越的存在の「肉体」によって「古い肉体」が死滅に追いやられる際の内実を表現したものと考えられる。

> Devant une neige un Etre de Beauté. Des sifflements de mort et des cercles de musique sourde font monter, s'élargir et trembler comme un spectre ce corps adoré; des blessures écarlates et noires éclatent dans les chairs superbes[13].

作品冒頭に，超越的存在であり，同時に生の象徴である「美しい存在」が提示され，続いて死と生の相克が，どちらかと言えば死を喚起するイマージュに力点を置きながら，使役動詞《font》とそれに続く不定法《monter》，《s'élargir》，《trembler》を用いることによってディナミックに描かれる。「美しい存在」の肉体を示す「この崇拝された肉体」が作品の最後に「俺達の骨は愛に溢れた新しい肉体を纏っている（引用(16)）」とあるように，此岸の「俺達」に「新しい肉体」としてもたらされるのだが，ここから当然『ジェニ』にあったような古い肉体が想定される。この想定された古い肉体が死滅し，それに変わって「新しい肉体」が生まれる，言い換えれば，古い肉体と「新しい肉体」との間に死が横たわっているとするならば，「俺達」が享受する「新しい肉体」＝新しい生は，結果として生に対立する死がもたらすものであると言える。そして，使役動詞《font》は新しい生が死によってもたらされることを示すために用いられたのだ。

> (...) Les couleurs de la vie se foncent, dansent, et se dé-

gagent autour de la Vision, sur le chantier[14].

大文字で書かれた「幻」もまた「美しい存在」の言い換えなのだが，この言い換えには大きな意味が隠されていそうだ。フランス語の〈la vision〉には，超自然的なものの現れである幻の他に，特に19世紀においては人間の心に浮かぶイマージュ〈l'image mentale〉の意味もあった[15]。このことに加えて，前文最後の「肉」には，複数形で書かれている場合，絵画や彫刻の露出した肌の意味があること，この文の主語である「色合い」，最後に置かれた「台架の上」，さらに作品冒頭の一文が絵画を思わせることを考え合わせれば，巨大な画布に「幻」を定着させようとする画家の姿が想像できる。つまり，彼方にある幻が画家の肉体と精神を通り画布の上に再現されるのだ。そのとき，画家は彼方の幻を己のものにすることができる。このような画家の営為を詩人に重ね合わせるとき，この一文は作品の前半と後半を媒介する働きを担っていることになる。『陶酔の午前』では詩人が「毒」という語に与えた思想的意味から，「毒」が媒介物になっていたが，『美しい存在』では表現の喚起するイマージュが媒介物としての働きを担っていると言える。

(...) Et les frissons s'élèvent et grondent et la saveur forcenée de ces effets se chargeant avec les sifflements mortels et les rauques musiques que le monde, loin derrière nous, lance sur notre mère de beauté, — elle recule, elle se dresse. Oh! nos os sont revêtus d'un nouveau corps amoureux[16].

引用(13)にあった表現と酷似した表現が見られるが，「喘ぎ」に付加されていた名詞の持つ存在の喚起力に依る「de＋名詞」といった表現は採られず，ごく普通に形容詞が付けられているに過ぎないこと，そして「音

楽」にかかる形容詞の変更もさることながら，「輪」という語が削除されていることにより，楽音の積み重なり，拡がりが断たれていることから，死の退行が窺い知れる。死の退行は当然，生の横溢を意味するのであり，彼方にあった「美しい存在《un Etre de Beauté》」は，今や「俺達の美しい母《notre mère de beauté》」── 大文字から小文字への変化と不定冠詞から所有形容詞への変化は，彼方にあった超越的存在が此岸の存在に変わったことを意味する ── となり，「俺達」に「愛に溢れた新しい肉体」を授けてくれる。が，この「愛に溢れた新しい肉体」という表現と『陶酔の午前』における「約束」を実行に移す際の目的である「大層清らかな愛を惹き起こす」こととの類似を考慮に入れれば，表面的には反キリスト教的表現が見られないものの，『美しい存在』は，先に述べたように，キリスト教に掣肘された肉体が「新しい肉体」によって死滅に追いやられる際の内実を表現した作品である。

4

『陶酔の午前』，『ジェニ』，『美しい存在』の3作品を通して理解されたことは，キリスト教社会の制度化された言語が巣喰う古い肉体を滅ぼし，キリスト教から解放された新しい肉体に宿る言葉によって，新しい世界を開くことが企図されたということだったが，最後に，その企図の成就されたことを窺わせる作品『大売出し』の一部を掲げることで，本論の締めくくりとしたい。

> A vendre les Corps sans prix, hors de toute race, de tout monde, de tout sexe, de toute descendance! Les richesses jallissait à chaque démarche! Solde de diamants sans contrôle!

(...)

Élan insensé et infini aux splendeurs invisibles, aux délices insensibles, — et ses secrets affolants pour chaque vice — et sa gaîté effrayante pour la foule.

A vendre les Corps, les voix, l'immense opulence inquestionable, ce qu'on ne vendra jamais. Les vendeurs ne sont pas à bout de solde! Les voyageurs n'ont pas à rendre leur commission de si tôt[17)]!

全8段落からなる作品中，第2段落と並んで《A vendre...》の書き出しを取らずに挿入された第7段落（引用文中）において，まさしく詩的世界の創造をなし得たことへの恐ろしいまでの自負が読み取れるように，現実世界のありとあらゆるものを詩的世界のうちに再構成し得たことへの自負を窺わせて余りある作品『大売出し』においても，「肉体」という語は用いられている。否，詩的世界といえども世界を開示するものが肉体であるとすれば，そのような作品においてこそ，作品中2度使われている「肉体」という語がともに大文字で書き表されていることからも充分に窺えるように，キリスト教のみならず，ほぼ考えられる限りの桎梏から解放され，先の3作品の「肉体」からは想像もできないような価値を付与された「肉体」が見出され，その「肉体」は尽きることがない —「売り手の方では種切れになることはないよ！」— と言い切れるのも当然である。

本論では，「肉体」という語を通して4つの作品を捉えてきたわけだが，『陶酔の午前』と『ジェニ』においては，超越的存在を措定し，その肉体によってキリスト教に掣肘された古い肉体を死滅に追いやることが，また，『美しい存在』では，古い肉体が「新しい肉体」によって死滅に追いやられる際の内実が描かれていた。そして，これら反キリスト教的色彩の濃い

3作品中の「肉体」と『大売出し』中の「肉体」との間には大きな隔たりのあることが確認される。換言すれば，先の3作品と『大売出し』との間には「新しい肉体」によって開示されたきらめくばかりの詩的世界の拡がっていることが予想されるのだ。そして，『大売出し』において矜恃をもって語られた詩的世界の内実がどのようなものであるかは『イリュミナシオン』中の他の作品を通して明らかにされることになろう。

注

『イリュミナシオン』からの引用はすべて，Arthur Rimbaud, *Illuminations,* Texte établi et commenté par André Guyaux, (Langages, À la Baconnière), 1985 を，また，『地獄の一季節』及びランボーの書簡に関しては，Arthur Rimbaud, *Œuvres complètes,* Édition établie, présentée et annotée par Antoine Adam, (Bibliothèque de la Pléiade), 1972 を用いた。

1) *Matinée d'ivresse,* p. 46
2) *Mauvais sang,* p. 96
3) *Adieu,* p. 117
4) *Lettre de Rimbaud à Paul Demény,* 15 mai 1871, p. 251
5) *Matinée d'ivresse,* p. 46
6) *Génie,* p.73
7) *Ibid.,* p. 73
8) *Ibid.,* p. 73
9) *Ibid.,* p. 73
10) *Ibid.,* p. 73
11) *Conte,* p. 27
12) 小谷征生，「A. ランボー：『美しい存在 *Being Beauteous*』── 新しい生の享受」，大阪府立貿易専門学校紀要，第8号，1989，p. 45
13) *Being Beauteous,* p. 56
14) *Ibid.,* p. 56
15) *Grand dictionnaire universel du 19e siecle* par P. Larousse
16) *Being Beauteous,* p. 56
17) *Solde,* p. 74

（大学院後期課程学生）